

欧米言語文化学会 30 年の歩み

(文中敬称略)

1. はじめに

本会の前身である『ふおーちゅん同人』が産声を上げたのは昭和 63 年 (1988 年) のことでした。以後地道に活動を続け、2018 年には 30 周年を迎えました。そこで同人誌 (研究誌) 『ふおーちゅん』、学会誌『欧米言語文化研究 Fortuna』 (以下 *Fortuna*) 及び記念出版物の記事などを抜粋しながら、本会のこれまでの歩みを振り返ってみたいと思います。

2. 黎明期

本会は早稲田大学の当時の大学院生を中心とする数名によって創設されました。その中心になったのは大西章夫で、翌年の平成元年 (1989 年) 1 月 31 日に『ふおーちゅん』の創刊号が発刊されました。以下は「発刊の辞」から抜粋したものです。

英語学・英米文学の同人誌発刊という内なる願望が表面化したのは、桜の花も咲き揃い、新緑が目には鮮やかな、昭和最後の春でした。…夏には現業としての同人組織が設立されましたが、辺りの景色のままに、見通しは文字通り “full of green wood” でした。秋が過ぎ、それまでの部会の方々に加えて、早稲田大学の諸先生や院生の方々にもご支援・ご協力いただき、何とか発刊に漕ぎ着けました。今日に至るまで暖かく見守って下さった関係者の皆様に、改めて厚く御礼申し上げます。

本誌は英語学・英文学・米文学と包括的な専門範囲で創刊致しました。…本誌自体も、会員は気軽に投稿でき、かつ相互の練磨と向上の一助となるようにしていく所存です。ご高覧の皆様のお忌憚なき御批評・ご教示をお待ちしております。(『ふおーちゅん』創刊号 1)

当時、早大の人文学系の同人誌にはいくつかの先輩誌がありましたが、恐らくもう少し気楽に書ける場、あるいは自由に文学談義などのできる場が欲しかったのでしょう。というのは、当時は、特に修士課程の学生は「修士論文が先」ということで研究論文を投稿したり口頭発表をしたりするのは難しかったし、大学院生がエッセイや翻訳などを投稿することなどちょっと考えられなかったからです。博士後期課程の学生にしても冒険的な論文を投稿するには少々勇気がいりましたし、口頭研究発表も相当な緊張の中で行われたものです。ところが創刊号に特別寄稿を寄せた野中涼や故出口保夫のように、気軽に論文やエッセイを書いたり、口頭発表をしたりすることを大学院生に懲慥する先生もいました。そしてそのような先生方の激励と支援によって、この新しい同人会は

発足したのです。以上のような経緯から同人誌『ふぉーちゅん』は、若手の研究者が自由かつ気楽に書ける場となりました。例会においてもあまり規制を設けず、必要があれば1つの研究発表に1時間以上かけることも珍しくありませんでした。加えて同人誌の合評会が行われることも多かったので、『ふぉーちゅん同人』は文字通りお互いが切磋琢磨しながら学び合う場となったのです。

以上のように若さと勢いだけで始めた同人活動でしたが、顧みると本会は、実に数多くの（大先輩でもある）諸先生方のご支援やご協力に支えられてきました。その代表的なものとしては『ふぉーちゅん』と *Fortuna* の巻頭を飾った「特別寄稿」が挙げられます。野中涼・出口保夫・松坂ヒロシ・日高八郎・井内雄四郎・三宅鴻・三浦修・品田一良・新井明・佐藤治夫・井上時男・柳井幸雄・佐伯彰一・東郷秀光・松島正一・剣持武彦・鈴木健三・辻裕子・西山清・水之江有一・濱野成生・笠原順路・桑子利男・田口哲也・本田康典・圓月勝博・関谷武史・佐藤義夫・滝沢正彦・広本勝也・秋葉隆三・江野沢一嘉・行方昭夫・藤野文雄・木村三郎（掲載順）といった錚々たる先生方が玉稿を寄せられました。「すでに亡くなられた方々を含む多くの先生方のお言葉に、私たちは叱咤激励され、「育てられて」きた」のでした（20号 143）。

ここで本学会誌『ふぉーちゅん』及び *Fortuna* という誌名の由来について見てみましょう。

『ふぉーちゅん』という誌名の由来は、創刊号の「表紙に掲げた早稲田大学の坪内逍遙博士記念演劇博物館です。ご存知の通り、シェイクスピア時代の英国の劇場 *The Fortune* に形どり、昭和3（1928）年に開館しました。この“fortune”という言葉や、同館につけられたラテン語“*Totus mundus agit histrionem*”（世界は全て劇場なり）は、我々の人生標語としても意義深いものがあると思います」（創刊号 59）

研究誌の表紙の写真については、第11号まではできるだけ“fortune”にちなんだものを載せましたが、それもだんだん難しくなってきたので、第12号からは小林英美（2019年から会長）が提供したイギリスの由緒ある建造物を使用しました。そして第13号からは小林による表紙の写真の説明したエッセイを加えるようになり、今日に至っています。

黎明期ということもあり、『ふぉーちゅん』の編集代表（編集委員長）は創刊号から第8号までは持ち回りで毎号変わりましたし、この時期は色々なことがありました。まず第2号で「国際標準逐次刊行物番号」（ISSN）を取得しましたが、これは「3号雑誌」で終わることなく、活動を末永く続けていくことの決意の表れでもありました。またこの時に植月恵一郎が新たに会長に就任し、以後平成31年（2019年）3月まで30年間の長きにわたって会を誘掖することになります。先にも述べたように、本会は早大の大学院生を中心に創設されましたが、当初から早稲田だけで固まるつもりはなく、寧ろ「インターカレッジ・

サークル」を目指していました。そしてこれが既述の会の運営方針と相俟って予想以上の支持を集めたのは望外の幸せでした。

当初会員数 11 名でスタートした本会は、第 2 号では 16 名、第 3 号では 27 名、第 4 号では 30 名と会員を順調に増やしていきます。そこで、より一層本格的な研究活動ができるようにと、平成 5 年（1993 年）、会の発足 5 周年記念に合わせて本会を『ふおーちゅん同人』から『新生言語文化研究会』に改組・改称することになりました。ちなみに第 5 号での会員数は 35 名でしたが、この改組・改称がまた本会の発展の大きな転機となります。

実のところ創刊号こそ活字印刷で出したものの、その後第 5 号までは投稿者が提出したワープロ原稿をそのままオフセット印刷する形で発行したために、論文毎に書式も見栄えも全然違っていました。それで時には「瓦版」と揶揄されることもあったのですが、平成 6 年（1994 年）に発刊した第 6 号からは活字印刷に戻し、抜き刷りも出せるようになりました。これは音羽書房鶴見書店と金星堂が本会の賛助会員になったことが大きかったです。両社は本会がまだ学会でさえない少人数の研究会であったにもかかわらず、本会の活動を支援し、本会の 10 周年・20 周年・30 周年記念本の他、本会のいくつかの企画出版も引き受けたのでした。また出口保夫が名誉顧問に就任したのもこの頃でした。その結果、会員数はさらに増えて、第 6 号の時には 40 名に達し、10 周年を迎えた平成 10 年（1998 年）頃には 50 名を超えました。『ふおーちゅん』への投稿数も多く、編集委員は毎号嬉しい悲鳴を上げたものです。例会活動も非常に活発で平成 6 年（1994 年）には毎月（計 12 回）開催されるなど 1990 年代の半ばまでは年に 10 回前後開催されていました。その時の風景は *Fortuna* 20 号の編集後記の中で次のように述べられています。

1990 年代のはじめ、本会がまだ「新生…」ですらなかった頃、例会研究発表はおもに早大文学部の大学院生ラウンジで行われていました。破れたソファと灰皿の群がる殺風景な場所で、ジーパンに T シャツ姿の団が何かを熱く議論している、そんな光景でした。この時期はなかなか場所が定まらず、ほかにも学習院大学の一室、早大図書館の休憩室などをそのつど転々としていました。1992 年より早稲田界限の簡素な貸しスペース「セミナーハウスきむら」の一室を毎回参加者が使用料を出し合って借りるようになりました。この「きむら」では、ときにはテーブルのある部屋で、ときには陽のさす畳部屋に座布団をしいて例会が重ねられ、回数は歴代最高の 37 回にのぼりました。…その間に賛助会員として金星堂、音羽書房鶴見書店のご支援も得られるようになりました。…会のインターカレッジ化も徐々に進み、1998 年には関西支部が発足。いつの頃からか非公式に恒常化した例会後の酒宴も、会員の交流・拡大に少なからぬ貢献をしました。

（*Fortuna* 20 号 143、字句などを一部改変）

というわけで、『ふぉーちゅん同人』発足後の 10 年間は、まだみんな若く、この会での活動を通じて専任教員に就くことのできた会員も出始めるなど、希望と活気に溢れた時代でした。そして平成 11 年（1999 年）には、会の創立 10 周年を記念して、音羽書房鶴見書店より『英米文学の原風景—起点に立つ作家たち』を上梓したのです。

3. 次の 10 年間—学会化に向けて

以上のように本会の最初の 10 年間は概ね順風満帆でした。しかし時代は英文学を専攻する者にとって、いやむしろ「大学の教員にとって」と言った方がよいかもかもしれませんが、決してよい方向に向かっていただけではありません。1990 年代に入ると教養部や一般教養課程は次々と改組され、大学における「英語」という科目の位置づけも変わっていきました。また「文学は英語を習得する上で役に立たない」といったことが言われるようにもなり、英語教育は次第に実用色を強めていきます。それで英文学を専攻する者にとっては、最早「就職戦線異常なし」というわけにはいかなくなり、時には英文学を専攻していることで肩身の狭い思いをする場合さえ出てきました。セメスター制が導入され、以前にはなかった様々な校務（雑務）も徐々に増えていきました。1990 年代はその「序奏」の時代だったと言えるでしょう。それが顕在化するのが次の 10 年、即ち 2000 年代でした。『ふぉーちゅん』第 10・11 合併号の巻頭言「『ふぉーちゅん』の 21 世紀—十周年に寄せて」の中で、植月はそういったことを予言するかのように、次のように述べています。

大変な時代である。他でもない。大学の置かれている現状である。…学生がどんどん減っていくなかで、教育事業全体を取り巻く問題である。教える側だけを考えても、専任教員の採用が極端に手控えられ、（とくに語学の）非常勤講師が大量にリストラされるという週刊誌記事が掲載される一方で、小学校教育に英語を積極的に取り入れ、21 世紀の英語「第二公用語」案も政府部内で検討されている。この会が結成された約 10 年前は、文部省の大学設置基準大綱化以前で、いわゆる教養部解体もほんのかすかな予兆はあったとはいえ、語学の教員はまだ安泰だった。ある年配の教員によれば、この大綱化は学生運動による大学紛争以来の難局であるそうだ。（『ふぉーちゅん』第 10・11 合併号 1）

加えて草創期のメンバーも最早学生ではなくなり、以前のように時間があり余っているというわけではなくなりました。これは本会の活動の柱であった「例会」に特に大きな影響を与えました。最盛期は月 1 回（年 12 回）行われた例会も平成 8 年（1996 年）には年 8 回に減り、翌年には年 7 回、そして平成 12 年、つまり 2000 年代に入ると年 5 回の開催となり、減少傾向が続きます。さらに翌年の平成 13 年（2001 年）からは年 4 回となり、最盛期と比べると開催

回数は3分の1にまで減ってしまいました。誰もが忙しくなってきたのです。

他方『ふおーちゅん』への投稿は依然として多く、論文の質も次第に向上していきました。ちなみに第15号では論文だけでも13本の投稿があり、総頁数も200頁に達しました。会員も依然として増え続け、井内雄四郎が顧問に就任した平成17年(2005年)には60名を突破しました。井内は、極力上下関係を排し、論文・口頭発表を問わず研究成果を自由に発表できる風通しのよい会運営に共感し、本会の支援を快諾したのです。というわけで、英文学を取り巻く状況に変化は起こり始めてはいたものの、本会の活動は、全体的に見れば依然として堅調でした。ちなみに先の「『ふおーちゅん』の21世紀一十周年に寄せて」の中で、植月は次のようにも述べています

そのような有為転変の世の中で変わらないものがあるとすれば、そして我々が拠り所とすべきなのは、優れた論文を書いていくしかないということだ。一つ一つの作品を熟読し、先行研究を充分渉漁した上で、自分の見解を提示する。最新の批評理論で論文を次々発表する若手研究者が増えつつある昨今、地道な研究活動は「言うは易く行うは難し」ともいうべき大変なことだ。さらに、質の高い論文を書いたところで就職も見つからないと落胆して書かなくなってしまうと、ますます評価が下がってしまう時代を確実に迎えてつつある。着実な研究発表と論文執筆を活動の中心としている限り、「ふおーちゅん」の21世紀は明るい。

(『ふおーちゅん』第10・11合併号1)

本会はこの植月の助言に従う形で10周年以降も地道に活動を続けたのでした。しかしここで大きな問題に直面することになります。大学教員の採用や昇格での業績審査が厳しくなってきたのです。本会は平成5年(1993年)にそれまでの同人会を研究会に改組しましたが、学会ではなかったため、掲載論文を業績として数えてもらえない、あるいは低く見られる、というケースが出てきてしまいました。また同人誌と看做されたためにCiNiiやNDLで検索しても『ふおーちゅん』に掲載された論文は全くヒットしません。これではどんなに素晴らしい論文を書いても、学界(社会)に発信・貢献することができません。口頭研究発表にしても、それが行われたのが学会であるか研究会(同人会)であるかによって「業績」として大きな差が出てしまい、こういった問題は何としても打破する必要がありました。加えて会が発足して20年近くたった平成19年(2007年)には会員数も70名近くにまで増えており、その9年前の平成10年(1998年)には関西支部が設立され、安定した活動が行われていました。従って、減ったとは言え、関西支部の分を合わせれば例会も年に5~6回開催されていました。つまり小規模ながら学会としての要件も一応揃っていたわけです。そこで、平成20年(2008年)に成人式を迎えた本会はこれを機に学会へ改組し、「欧米言語文化学会」として活動していくことになります。そし

て翌年の平成 21 年には、創立 20 周年を記念する『実像への挑戦—英米文学研究』を音羽書房鶴見書店より上梓したのです。ちなみに「欧米言語文化学会」という名称にしたのは、今後は英語・英文学だけでなく、欧米の様々な言語文化（絵画や映画など諸芸術についての論考を含む）も取り込むことを目指したからです。

学会化にあたっての懸念材料としては、これまでのように自由に投稿したり、発表したりすることができなくなるのではないかと、学会誌に今後もエッセイや翻訳などを掲載してもよいのかということがありました。しかし、学会の存在意義はそれぞれの研究分野を発展・振興させて社会に貢献することであり、この目的を達成するために、投稿対象を論文・書評だけに限定する必然性などないはずで、例会においてもこれまでのやり方を踏襲することがその目的の達成の妨げになるとは思われません。そこで、年 4 回の例会のうち 1 回を大会として開催すること、誌名を『ふおーちゅん』から『欧米言語文化研究 Fortuna』（通称は *Fortuna*）とすることを除いて、基本的にはこれまでと同じやり方を踏襲することになりました。

4. 学会化後から今日に至るまで

こうして本会は「学会」として新たな船出をするのですが、学会化後の 10 年間は様々な困難にも見舞われました。まずこの 10 年の間に、大学における研究・教育環境が信じられないほど悪化しました。年間の授業回数はもちろん、以前では考えられなかったようなものを含めて校務（雑務）が激増し、自分の研究はおろか授業準備の時間さえろくに取れなくなることも珍しくなくなりました。また英語教育の実用志向も強くなる一方で、英語の授業で文学作品を扱ったり、英文法を集中的に教えたりすること、つまり自分の専門を授業で活かすことがますます難しくなっていました。大学の英文学科も次々と改組・廃止され、英文学や英語学を専攻する研究者の雇用状況も悪化の一途を辿ります。その結果、大学院とりわけ博士課程に進学する学生も激減しました。この 10 年の間に、大学教員という職種がすっかり変わってしまったような観があります。こういったことは本会の例大会運営にも大きな影響を与え、平成 23 年（2011 年）からは例大会の数をさらに減らして年 3 回（大会 1 回、例会 2 回。但し関西支部の例会を合わせると年 4~5 回）にせざるを得なくなりました。

また学会化後は *Fortuna* の発刊も遅れることも珍しくなくなりました。その原因は上述の研究・教育環境の悪化に加えて「学会としての責任」、つまり学会を名乗る以上、それに相応しい水準の論文を掲載すべきという意見が出たことも大きかったです。そのためにこれまでの伝統である「原則掲載」と「質の向上」を両立させなければならなくなったことから、編集委員の負担も激増しました。

というわけで、学会化後は順風満帆というわけにはいきませんでした。そ

れでも地道に活動を続けた 10 年間、ということではできると思います。例えば例大会は、開催回数こそ減らしたものの質量とも一層充実したものになりました。これまでの例会は口頭研究発表が中心でしたが、学会化後の第 1 回大会では研究発表に加えてシンポジウムも開催しました。以下は 21 号の「編集後記」から抜粋したものです。

ところでその本学会第 1 回年次大会について一言ご報告させていただきます。2009 年 12 月 13 日（日曜日）、日本大学文理学部にて無事開催されました。師走の肌寒い一日でしたが、幸いにも程よい参加者が集まり、研究発表とシンポジウムが行われました。シンポジウムは「言語芸術と視覚芸術の融合」というテーマで…文学と美術の接点をめぐる充実した発表を聞かせていただきました…。広大な「欧米言語文化研究」を掲げる本会の、今後の方向付にふさわしい大会となりました。（*Fortuna* 21 号 204）

このように学会化後は例大会で「シンポジウム」や「講演」などもさかんに行われるようになり、かつこれまでと違って、英文学以外の分野も積極的に取り上げるようになりました。こういったシンポジウムが発端となって出版企画に発展したことも多く、この 10 年の間に『読者ネットワークの拡大と文学環境の変化—19 世紀以降に見る英米出版事情』『旅と文化—英米文学の視点から』（以上音羽書房鶴見書店）『学問的知見を英語教育に活かす—理論と実践』（金星堂）の 3 冊を上梓することもできました。さらに 23 号からは「近代日本文学が欧米文学の大きな影響の下に発展してきたことに鑑み、日本文学を中心に比較文学なども研究している会員が専門領域の慣行書式を変更することなく論文を発表することができるように、縦書き論文も受理・掲載することになりました」（*Fortuna* 23 号 188、字句などを一部改変）。

またこの 10 年間で大きく変わった点として、英語学と英語教育学の投稿や研究発表・シンポジウムが大幅に増えたことが挙げられます。これは学会化後に野村忠央（現副会長）が加入したことが大きいです。野村は英語学・英語教育分野の事実上の責任者となり、両分野を本会の活動の柱の一つにしました。その結果、野村が 2022 年度から会長を務める日本英語英文学会（JAELL）との研究交流も進み、最近では編集委員会同士での助け合いはもちろん、例大会においては双方が会員を招待し合うなど協力団体の関係にまで発展しています。会員もさらに増え続け、平成 25 年（2013 年）には 80 名を突破、その 4 年後の平成 29 年（2017 年）には 90 名を超えました。というわけで、紆余曲折はあったもののこの 10 年間も会は発展し続け、平成 30 年（2018 年）には創立 30 周年を迎えることとなります。そして新型コロナ禍などの影響により予定よりも大幅に遅れたものの、2021 年には（30 周年記念出版の）『多次元のトピカ—英米の言語と文化—』が刊行されたのでした。

5. 今後に向けて

以上のように地道かつ堅実に活動を続けてきた 30 年間でしたが、前途は決して明るくはありません。本会は昭和最後の年に発足しましたが、昭和と言えば、「乞食と大学教授は 3 日やったら辞められない」といったことまでが言われた時代でした。しかしそのお蔭でやる気のある教員は、授業準備にたっぴりと時間を取って、かつ本格的な研究にあたることも可能だったのです。しかし、平成に入ると事態は悪化の一途をたどり、今では教育・研究よりも校務に忙殺される職場になってしまいました。しかも専任・非常勤を問わず雇用状況も不安定になり、さらに定年までが一般企業とほぼ横並びになったために、若手の研究者、すなわち後継者も激減してしまいました。加えて、実は *Fortuna* 20 号の編集後記に「かつてのジーパン姿の若者たちはいつしか背広姿になり、「院生」から「先生」になり、頭には白いものがちらほら見えるようになりました」(143) という記述があるのですが、その時から 10 年以上経過した今、さらに次の 10 年後を見据えると、本会の草創期のジーパン姿の元「院生」はそろそろ定年に、あるいは定年が近くなっているのです。いつの間にか本会にも高齢化の波が押し寄せています。これまではなんとか「延命」できたものの、この「少子高齢化」の中で、果たして本会は次の 10 年後も存在しているのでしょうか？

しかしながら、過度に悲観的になる必要はないのかもしれませんが。というのは、本会は大学における英語系研究、とりわけ英文学研究が衰退の一途を辿り、比較的規模の大きい学会でさえ会員数を減らし、中小の学会・研究会が次々と店仕舞いをしていく中でとにかく発展をし続けてきたからです。これはもちろん会員・役員諸氏の不断の努力の賜物なのですが、同時に本会が学会化後も「原点」を忘れなかったことも大きいのではないのでしょうか？ つまり、お決まりの一つのやり方ではなく、様々な方法で自由に研究成果を発表できる。若手を育て、業績作りにも力を入れる一方、極力上下関係を排してできるだけ風通しのよい会運営をする。言論の自由を大切にする—そういった会運営がこの逆風がある程度、跳ね返したような気がするのです。

本会はあまり学会らしくない「学会」で、ある意味では「同人学会」とも言えます。しかし、それが却ってよかったのかもしれません。というのは、本会のような小さな学会が厳格かつメジャーな学会の真似事をすれば、たちまち存在意義を失うからです。たとえば査読において、掲載基準が全く同じならば、メジャーな学会に投稿した方がよいに決まっています。本会では論文以外のものでも投稿できますし、必要があれば制限枚数を超えることも認められます。査読も非常に丁寧にやっていますし、最初から立派な論文を書ける者などまじらないので、査読者の尽力によって若手の原稿が掲載可能になったケースも数多くありました。さらに口頭研究発表の方法や発表時間にも柔軟性を持たせていますが、そういった面が恐らく本会の存在意義になっているのかもしれませ

ん。加えて、先にも述べたように、学会の存在意義はそれぞれの研究分野を発展・振興させて社会に貢献することであり、この目的を達成するために、投稿対象を論文・書評だけに限定するといった制限を設ける必然性などないはずで

す。

本会がこれからどのような道を歩んでいくのかは現時点ではまだ分かりません。しかし、今述べたような本会の基本姿勢を守っていけば、長く続く「冬」の時代を何とか乗り切り、いつか来るであろう「春」の時代を迎えるのは不可能ではないと思います。先に上梓された 30 周年記念出版物の『多次元のトピカー英米の言語と文化』を編集するにあたって、できれば本会の「原点」と「存在意義」を示すことのできるような一冊にしたい、という思いがあったのは確かです。この本が通常の「記念論集」とは大きく異なり、学術論文はもちろん、研究ノート・評論・エッセイ・翻訳（と解題）・作品解説・レポートなど実に様々な方法による研究成果が掲載されているのもそのことによるものです。

付記

この文は植月恵一郎ほか編『多次元のトピカー英米の言語と文化』（金星堂、2021）所収の「欧米言語文化学会 30 年の歩み」（執筆：植月恵一郎・奥井裕）をホームページ用に改稿したものです。